

## コーヒー物語 ドトールコーヒー

終戦から 14 年が経とうとしていました。荒廃の中から立ち上がった日本が少しずつ自信を持ちかけてきた頃、国民の心を一にする吉報が日本中を駆け巡りました。

皇太子殿下（現、天皇）のご成婚。

ちょうどその慶事を 4 月にひかえて沸きだっていた 1959（昭和 34）年 2 月のある朝、一人の青年が、横浜の山下埠頭からブラジル行きの船に乗り込みました。「あるぜんちな丸」と名づけられたその船はその日が 2 回目の航海でしたが、20 歳の青年にとっては“処女航海”でした。

色とりどりの紙テープの中、船は緩慢な動きでしずしずと港を離れます。この時デッキで、将来のコーヒー業を夢見て「ついに、日本を出てやったぞ！」と静かに燃えていた青年こそ、ドトールコーヒーの創業者、鳥羽博道の若き日の姿でした。

鳥羽青年を乗せた「あるぜんちな丸」は、横浜からロス、パナマ、ベネズエラと 42 日間の航海を経て、ついにリオデジャネイロの港に接岸しました。

憧れのブラジルに第一歩をしるした鳥羽は、そののち、見るもの聞くものに感激と驚きの日々を送ることになります。道で知り合いに会うと「コモ・バイ！（やあ、しばらく）」「トマ・カフェ（コーヒー飲もうか）」とバールと呼ばれるドトールコーヒーショップのような店に入ってサッカーの話に興じ、また時間をつくってはコーヒー農園を訪ねて作業工程

を学び、現場監督として現地の労働者と共に汗を流しました。

地平線の彼方まで広がる広大な農園。そこにお城のような農園主の家と自家用の飛行機が。そんな光景を目のあたりにした夢多き青年が、「いつの日か、自分も農園主になりたい！」と野望を抱いたとしても不思議ではありません。

ブラジルでの日々は、コーヒーをはじめとする様々な異国の文化が、真綿に水がしみ込むように鳥羽の中に入り込み、刺激しました。その証

は、20 代のはじめにコーヒーの本場で体で学んで来たことは、なにも代えがたい財産となっていて、今も生きています。リオに半年、サンパウロに 2 年のブラジル修業。その時にサンパウロで住んでいた住所が「ドトール・ピント・フェライス通り 85 番地」といいました。

ブラジルから帰国した鳥羽は、約 1 年の準備期間を経て、コーヒー豆の焙煎会社を設立します。1962（昭和 37）年、鳥羽 24 歳の春でした。社名は、サンパウロで住んでいた地名にちなんで「ドトールコーヒー」と名づけました。（中略）

「ドトールコーヒーショップ」の 1 号店は、1980（昭和 55）年 4 月 18 日、原宿で産声をあげました。間口 4m、奥行 7m、わずか 9 坪ほどの小さな店でしたが、ついに、安く、早く、しかも味はフルサービスの店に負けない、日本で初めてのヨーロッパ

を学び、現場監督として現地の労働者と共に汗を流しました。



スタイルの喫茶店のオープンです。ずっとあたためてきた思いが、いま目の前でカタチになる。この小さな店の成否が、これからのコーヒー業の在り方を、そして「ドトールコーヒー」の行方を決定する\_\_\_\_。

「ドトールコーヒーショップ」を世に送り出すにあたって、鳥羽はまずコーヒーの価格を 150 円(当時)と決めました。原価や必要経費などから導きだすのではなく、毎日お客さまの負担にならないコーヒー 1 杯分の価格はいくらだろう、という考え方から設定されました。この「お客さまの立場に立った発想」は、鳥羽の、そしてドトールの基本スピリッツとして徹底的にしみわたっています。（中略）

お客さまの支持を得て「ドトールコーヒーショップ」も順調に育っていた頃。かつてブラジルで抱いた“コーヒーの農園を持ちたい”という大きな夢を現実のものとする機会が訪れました。1995（平成 7）年、コナコーヒーの産地、ハワイ島コナ地区に「マウカメドウズ・オーシャン」（約 24 万 m<sup>2</sup>）と「マウカメドウズ・マウンテン」（約 43 万 m<sup>2</sup>）という 2 つの自家農園を開設したのです（現在も拡張中）。若き日に描いた夢が、四半世紀を経て正夢に。文字通りの“夢の農園”です。



余白上下左右 10 ミリ、段組 3 段、段の幅 23 字  
フォントは HG 丸ゴシック M-PRO、  
全日本コーヒー協会のロゴは、  
<http://coffee.ajca.or.jp/top.html> から入手  
絵はクリップアート（英語版）「coffee」で検索

(解説)

# コーヒー物語 ドトールコーヒー

終戦から 荒廃の  
中から立ち 持ちかけ  
てきた頃、国民の心を一にする吉報が日本中を駆け  
巡りました。

皇太子殿下（現、天皇）のご成婚。

ちょうどその慶事を4月にひかえて沸きだっていた  
1959(昭和34)年2月のある朝、一人の青年が、  
横浜の山下埠頭からブラジル行きの船に乗り込みま  
した。

その日、境界線を引く：チェック  
は“如 段数：3段  
色 段の幅 23字  
ずし 設定対象：選択された文字列  
ーヒ 段組みしたい部分を全選択すること  
と静かに燃えていた青年こそ、ドトールコーヒーの  
創業者、鳥羽博道の若き日の姿でした。

鳥羽青年を乗せた「あるぜんちな丸」は、横浜か  
らロス、パナマ、ベネズエラと 42 日間の航海を經  
て、ついにリオデジャネイロの港に接岸しました。

憧れのブラジルに第一歩をしるした鳥羽は、その  
のち、見るもの聞くものに感激と驚きの日々を  
ことになります。道で知り合いに会うと「コモ  
イ！（やあ、しばらく）」「トマ・カフェ（コー  
飲もうか）」とバールと呼ばれるドトールコーヒ

★フォント★

HG 丸ゴシック M-PRO

★段組み★

境界線を引く：チェック

段数：3段

段の幅 23字

設定対象：選択された文字列

段組みしたい部分を全選択すること

★ワードアート、オートシェイプ★

ワードアート  
書体；HG 創英角ポップ体  
オートシェイプ 背景：長方形

しました。

地平線の彼方まで広がる広大な農園。そこにお城  
のような農園主の家と自家用の飛行機が。そんな光  
景を目のあたりにした夢多き青年が、「いつの日か、  
自分も農園主になりたい！」と野望  
も不思議ではありません。

ブラジルでの日々は、コーヒーをはじめとする  
様々な異国の文化が、真綿に水がしみ込むように鳥  
羽の中に入り込 しみ、刺激しまし  
た。その証 拠に、20 代の  
はじめ はじめ  
ーの本 ーの本  
学んで 学んで  
なにも なにも  
がたい財 のにもつえ  
に生きてい 産となって今  
ます。リオに半年、  
サンパウロに2年のブラジル修業。その時にサンパ  
ウロで住んでいた住所が「ドトール・ピント・フェ  
ライス通り 85 番地」といいました。

ブラジルから帰国した鳥羽は、約1年の準備期間  
を経て、コーヒー店の経営会社を設立します。1962

★インターネットより取り込み★

URL: <http://coffee.ajca.or.jp/top.html>

対象画像上で、「右クリック」－「名前を付けて画像を保存」  
からダウンロード。

★画像の挿入★

「挿入」－「図」－「ファイル」から挿入。

話に興じ、ま  
めて作業工程  
と共に汗を流

★字下げ★

「字下げ：1字」

★クリップアート★

「キーワード：coffee」（英語版）で検索。  
テキストの折り返し：外周



(昭和55)年4月18日、原宿で産声をあげました。  
間口4m、奥行7m、わずか9坪ほどの小さな店で  
したが、ついに、安く、早く、しかも味はフルサー  
ビスの店に負けない、日本で初めてのヨーロッパス  
タイルの喫茶店のオープンです。ずっとあたたためて  
きた思いが、いま目の前でカタチになる。この小さ  
な店の成否が、これからのコーヒー業の在り方を、  
そして「ドトールコーヒー」の行方を決定する\_\_\_\_。

「ドトールコーヒーショップ」を世に送り出すに  
あたって、鳥羽はまずコーヒーの価格を150円(当  
時)と決めました。原価や必要経費などから導きだす  
のではなく、毎日お客さまの負担にならないコーヒ  
ー1杯分の価格はいくらだろう、という考え方から  
設定されました。この「お客さまの立場に立った発

売りの基本スピリッツ  
があります。(中略)

お客さまの支持を得て「ドトールコーヒーショッ  
プ」も順調に育っていた頃。かつてブラジルで抱い  
た“コーヒーの農園を持ちたい”という大きな夢を現  
実のものとする機会が訪れました。1995(平成7)年。  
コナコーヒーの産地、ハワイ島コナ地区に「マウカ  
メドウス・オーシャン」(約24万m<sup>2</sup>)と「マウカメ  
ドウス・マウンテン」(約43万m<sup>2</sup>)という2つの  
自家農園を開設したのです(現在も拡張中)。若き日  
に描いた夢が、四半世紀を経て正夢に。文字通りの  
“夢の農園”です。

コーヒーは世界の友達

